

## 平成19年度 養殖研究所運営会議

養殖研究所

### 1. 会議の概要

日時：20年3月3日 13:30 - 17:00

場所：養殖研究所 南勢庁舎大会議室

出席者：

外部委員： 長谷川健二（三重大学生物資源学研究科教授）  
 稲垣光雄（全国海水養魚協会専務理事）  
 中島博司（三重県科学技術振興センター水産研究部長）  
 寺田正生（三重県漁連常務理事，欠席）

養殖研： 中野所長、杜多業務推進部長、横山生産技術部長、生田生産システム 部長、飯田病害防除部長、佐野魚病診断・研修センター長、虫明栽培技術開発センター長、大迫札幌魚病診断・研修センター長（欠席）、首藤業務推進課長、中谷業務管理課長

### 2 18年度の指摘事項等のフォローアップ状況

第2期中期計画の位置づけ	外部評価委員の主な意見	実施状況と今後の対応方針
第1-2-(3) 組織	・養殖研の分散した庁舎間での情報交換・交流が重要	<p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・統合後、平成19年度も、顔を合わせて話し合う機会を大事にしている。部課長会議には札幌，上浦から参加させ、また年に一度ではあるが、札幌，上浦で開催した。</li> <li>・病害防除部，魚病診断・研修センターでは合同部会で、それぞれの研究員が交流するよう配慮した。</li> <li>・総務部門の業務の円滑化のために、三重、上浦、古満目の間で事務担当者が相互に打ち合わせを行った。</li> <li>・南勢の若手研究員が上浦の栽培技術開発センターに70日にわたり滞在する等、実験を共同で行ったり研修に参加するなど交流を行った。</li> <li>・複数のプロジェクト研究を共同して実施している。</li> <li>・南勢での一般公開に際して上浦、古満目の職員が参加した。</li> </ul> <p>(今後の対応方針)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの対応に加え人事交流なども含め、交流を行うよう努めていく。</li> </ul>
第1-2-(4) 職員の資質向上および人材育成	<p>・研究が幅広く、また深くなってきている。それに伴いコーディネーターの役割が重要となる。研究者はやりたがらないが育成していく必要がある。</p> <p>・将来を見越した基礎研究が必要であると共に、個々の研究者が産業のことを知らないといけない。技術開発のみによるモグラたたきの対応は限界に来ており、統合的な視点で問題解決に当たることが重要である。</p>	<p>(現状)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水研センターでは人材育成プログラムを検討中である。その中では40歳台中頃以降、組織的研究のリーダーとして活躍できる人材を育成したいとしている。</li> <li>・養殖研究所においては多くの競争的資金を獲得しているが、プロジェクトの中核研究者を若手研究者が見習い、次の中核となることを期待したい。</li> <li>・技術会議が開催したコーディネーターの育成を目的とした若手研修に3名を参加させる等、各種研修会への参加を促した。</li> </ul> <p>(現状)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上で述べた人材育成プログラムでは30歳代から40歳代に優れた水産業現場における研修を実施するとしている。</li> <li>・養殖研においては栽培技術開発センターへの職員の派遣や研修への参加を積極的に進めてい</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際的な環境を考えると今後、養殖生産の比重が増加すると考えられる。今後、我が国や県が海外情勢に対応した漁業を構築していく必要があり、そのための人材の育成が必要である。</li> </ul>	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 18 年度より養殖産業部会を設け、産業界の方に入っただき、ニーズや行うべき研究について議論をしている。</li> </ul> <p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人材育成プログラムでは国際会議や学会への派遣、長期在外研究を促進するとしている。</li> <li>・養殖研では平成 17 年と 18 年に若手研究者が長期在外研究を行っている。20 年度にも 1 名の長期在外研究が認められた。</li> <li>・UJNR の事務局を引き受けており、これらの制度や機会を生かして国際的な人材の育成に努めている。</li> <li>・タイ国より 3 名の研修生を受け入れた。1 名は 8 ヶ月、他の 2 名は 1 ヶ滞在了。</li> <li>・その他カナダ、韓国およびインドネシアからの研修生を受け入れた。</li> </ul>
<p>第 1-3-(1) 管理事務業務の効率化、高度化</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企画部門と総務部門が融合したとのことだが、統合後の意識改革が重要である。</li> </ul>	<p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・所長、部長および両課長で日常的に打ち合わせ会議を開き情報交換を実施している。</li> <li>・旧企画連絡室長および企画連絡課長が 2 階に移転し同じフロアで仕事を行っている。これに伴い、業務上の話し合いの機会が増えた。</li> <li>・業務推進部会を開催し、各課・係の業務の進捗状況を報告している。</li> <li>・意識の変革を図るために、各部の小課題評価会議に企画調整係長が出席した。</li> </ul> <p>(今後の対応方針)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ご指摘のように意識改革が重要と考えている。一緒に仕事をする中で縦割りの弊害の少ないフラットでより一層、効率的な組織運営となるよう努める。</li> </ul>
<p>第 2-2-(1)- イ(イ) 生態系機能の保全に配慮した種苗放流・資源培養技術の開発</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・栽培技術開発センターの研究方向に関して、栽培漁業における放流(自然)環境研究が重要である。</li> </ul>	<p>(実施状況と対応方針)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水研センター全体としての大きな課題と認識している。</li> <li>・アワビの放流効果について、一般研究を実施している。環境面については県が調査した情報の収集に努めている。</li> <li>・養殖研栽培技術開発センターでは DNA 標識等を用いた放流効果に関する研究を行っている。この中で海区水産研究所や各県水産試験所などとの共同研究を通じてご指摘の方向の研究を進めて参りたい。</li> </ul>
<p>第 2-4-(1) 国民との双方向コミュニケーションの確保</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カンパチのプロジェクトの説明を聞いて、これまでと違いわかりやすく、業界にも通じると感じた。研究の進捗状況等について業界や消費者にわかりやすい形で発信して欲しい。</li> <li>・小学生から一般市民、産業界に至る社会の多様な方面へのわかりやすい情報発信が重要である。</li> </ul>	<p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・養殖研の研究を理解していただくため「養殖研究レター」の発刊を始めた。この内容はホームページに掲載している。また水産行政関連機関はもとより各県漁連など漁業者団体にも送付している。</li> </ul> <p>(今後の対応方針)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後とも業界や消費者に向けての情報発信に努力する。</li> <li>・一般公開はもとより、各種の機会を捉えて情報発信に努めていく。</li> </ul>

<p>全般的意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・産業研究と基礎研究を両立させることは養殖研の宿命的な課題であり、その両立に向け頑張ってもらいたい。</li> <li>・養殖研は増養殖研究の核である。大学は混迷の時代に入っており、連携が強く求められる。大学の若手の受け入れ等にも努力して欲しい。</li> <li>・世界的に見て中国の存在がますます大きくなってきている。今後、中国との研究交流も視野に入れる必要がある。</li> </ul>	<p>(対応方針)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第2期中期計画はこの両立を意識した課題立てとなっている。栽培技術開発センターが養殖研の組織として発足したこともあり、有機的な連携のもと、ご指摘の方向に研究を進めたい。</li> </ul> <p>(対応方針)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特別研究員、支援研究員あるいは研修など、色々な制度を利用して若手の受け入れ、育成に努力する。</li> </ul> <p>(対応方針)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水研センターでは中国・韓国との研究交流を進めつつある。養殖研としてはブーメラン効果で日本の水産業が困らないよう気をつけながら、見学、視察や職員の派遣等を行っている。</li> <li>・中国、西北農林科技大学より招聘を受け、職員が16日にわたり滞在し、情報交換、技術交流および研究発表セミナーを実施した。</li> </ul>
--------------	---	--

3 19年度運営会議指摘事項等

第2期中期計画の位置づけ	外部評価委員の主な意見	実施状況と今後の対応方針
<p>第1-2-(3) 組織</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・栽培技術開発センターと他の部・センターが効率よく一体化して研究が出来る体制を考える必要がある。</li> <li>・所長の挨拶で所の運営に関しては、予算削減に対応した効率的運営を目指す。部長の役割を重視し、ラインを通じたわかりやすい運営を心がけるという点が上げられた。部長・センター長の責任を重視した運営体制については、まだ緒に就いたばかりと思うが、その具体的な取り組みと成果について報告いただきたい。</li> </ul>	<p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各種プロジェクト研究を共同で実施しており、成果も上がりつつあると考えている。</li> </ul> <p>(今後の対応)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・三重の本所と上浦の栽培技術開発センターとの人事交流を進める予定。</li> </ul> <p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部課長会議を部課長が管理職であるとの問題意識を醸成させ、育成する場として位置づけ対応している。</li> <li>・ラインを通じた情報の伝達、取りまとめを心がけている。</li> <li>・年度当初に各部、センターの運営方針を各長が提示し、部課長会議で議論している。その後、中間時、年度末の部課長会議で当初方針の進捗、成果と問題点等を確認している。この結果は部会等を通じて職員にも知らされており、透明性の高い所運営に寄与していると考えている。</li> </ul>
<p>第1-2-(4) 職員の資質向上および人材育成</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人材育成に関する取り組みの報告があったが、人材育成は組織の活性化を図るうえで重要な問題である。三重県水産研究部でも大きな課題であるので、体系的な取り組みや具体例を教えていただくとありがたい。</li> </ul>	<p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・養殖研究所においては多くの競争的資金を獲得しているが、プロジェクトの中核研究者を若手研究者が見習い、次の中核となることを期待したい。</li> <li>・科研費等への積極的な応募を指導している。</li> <li>・各種研修や国際研究集会への参加、競争的資金への若手を含めた研究者の応募を積極的に行うようよう配慮している。</li> <li>・職員評価に際して個別面談を重視するなど、一人一人の状況と今後の方向性を適切に把握することを大切に、日頃からの指導に役立たせるよう努力している。</li> </ul> <p>(今後の対応)</p>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・システムの取り組みについては水研センターで人材育成プログラムを検討中である。</li> <li>・今後も所におけるあらゆる機会を人材育成の場として位置づけ対応していきたい。</li> </ul>
第1-4 産学官連携 ・協力の推進強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・所長の挨拶で、研究推進方向に関しては、現場をよく見て、最終的には産業に貢献する技術システムを作り上げることを目指すという点が上げられた。今回の会議ではいくつかの実用的な研究成果を報告いただき、着実に取り組まれていると感じた。今後ともその方向で進めていきたい。</li> <li>・現場からのニーズを意識した研究を行おうという方向性は感じられた。一方、レベルの高いアカデミックな研究もある。最終的に現場を指向した研究を推進して行って欲しい。</li> <li>・産業界としては養殖の現場ですぐ活用できる研究を行って欲しい。</li> <li>・産業界に成果を渡すには経済学的検討や、産業界との共同研究など、分野を超えた組織横断的研究が必要である。</li> <li>・連携大学院だけではなく、個々の研究者の交流、共同研究を進めて欲しい。</li> </ul>	<p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成18年度から開催している養殖産業部会では、産業界の方に来ていただき、現場での問題やニーズについて貴重なご意見を頂いている。</li> <li>・産業界に応用できる技術の開発を目指して、水産業システム研究会に参加するなど水産工学分野との連携を始めたところである。</li> </ul> <p>(今後の対応)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水工研や経済学分野との共同研究などに積極的に取り組む予定である。</li> <li>・養殖産業部会、増殖連絡会において増養殖産業についての情勢把握を的確にして、次期計画に向けた研究の方向性を明確にしていきたい。</li> </ul> <p>(実施状況と今後の対応)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究者の交流、共同研究はかなり活発に行っている。今後もこれらを進めていきたい。</li> </ul>
第2-4-(1) 国民との双方向コミュニケーションの確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究の進捗状況等について業界や消費者にわかりやすい形で発信して欲しい。</li> <li>・産業の現場ではインターネット等による情報提供よりも、簡単なポスターを配布する方が効果がある。</li> </ul>	<p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水産行政担当者や漁協の幹部等を読者に想定して「養殖研究レター」を創刊した。</li> <li>・魚病関連では各種情報や診断法について養殖研のホームページで情報発信している。</li> </ul> <p>(今後の対応)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現場で使っていただけるような成果については全海水とも相談し、ポスター作成なども検討したい。</li> </ul>
第5-1-(2) 人材の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次代の研究を担う学生へのアピールによって人気をあげ、この分野への研究者の加入を図って欲しい。</li> </ul>	<p>(実施状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・連携大学院を実施している三重大と協力し3年生に養殖研の見学ツアーを企画するなどアピールに努めた。</li> </ul> <p>(今後の対応)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研修生の積極的な受け入れに努め、研究に興味を持つ人材育成に協力する。</li> <li>・連携大学院や集中講義などの機会を利用して学生へのアピールに努める。</li> </ul>

#### 4 その他（所感、問題点等）

会議運営に当たっては、運営会議の趣旨に則り、細かな課題評価に関する報告は割愛した。資料の簡素化、資料概要の添付、パワーポイントを用いたプレゼン等、外部評価委員の先生方がわかりやすい運営会議運営を行うように努めた。また今年から新たに委員に就任いただいた先生方には業務推進部長が出向いて予めご説明を行った。それらの結果、先生方の理解が深まり活発な討論が実施できた。先生方からは第2期の養殖研の研究方向について、産業とのつながりを意識したわかりやすい形になってきたので、さらに産業を意識した研究を進めて行って欲しいとの御意見をいただいた。また外部に開かれた研究所としてのスタンスの大切さ、業界や市民への情報発信の重要性などのご指摘をいただいた。これらのご意見を今後

の研究業務推進に役立てていきたい。